まさかの神様！？

レミリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさかの神様!?

【Nコード】

N7588Q

【作者名】

レミリス

【あらすじ】

主人公は容姿端麗、スポーツ万能、成績優秀と3拍子の天才イケメン。

しかしイケメンはイケメンでも残念なイケメンである。なぜ残念かというと、性格に問題がある。特段に性格が悪いわけではない。

逆に優しすぎるくらいだ。ただただ超鈍感なのである。

その性格のせいで17年間一度も恋愛をしたことが無い。

そんな青年のどこかぶっ飛んだお話…。

ジャンルは主人公最強系異世界統治ファンタジー。

神様との出会い（前書き）

どうも、レミリスと申します

初投稿なので誤字脱字は気にせず、気合で読みきってくださいww

作者の妄想世界なので退屈だと感じられましたらご退出ください

できるだけやる気を持続させていくつもりです

ではお楽しみください

神様との出会い

俺、黒龍「コクリュウ」 蒼真「ソウマ」は、よくわからないけど絶賛落下中。

上空3000メートルくらいか？

地面に激突するまで少し時間があるから、なぜこんな状況になったのか

説明をしよう。

それは今から5分前の出来事だ…

学校が終わり家に帰っていく途中ででっかい穴が道路にあった。

「……………なんだコレ？」

状況がまったく理解できない。

帰宅途中に突然真っ黒な穴があれば誰でも疑問に思うだろう、普通にやら危険な気がものすごくしたので迂回して通ろうとしたら、いきなり

巨大化しやがった。

「って、マジかよオオオオオオオオ！！！」

結局、穴に落ちてしまった。

そういう訳でこうなりました、お疲れ様です。

「ってざけんなああああ。誰の陰謀だ、コレ！？」

うん、こんなことしてるうちに地面まであと300メートルくらいまで落ちました。

「まあ、そういう神様もいるけど、ほとんどは世界の観察をしているわね」

苦笑交じりにそう言ってきた。って!?

「今、心読んだろ!？」

「当たり前じゃん、私神様だもん」

「マジかよ!？」

俺は神様相手になんてご無礼をしてしまったんだ!!
即座に神様の正面に正座し…

「すみませんすみません、数々のご無礼をお許してください」

土下座をしまくった。

「いって、いって!! 神様っていつてもそんなに偉いものじゃないわよ」

「…ちなみに階級は？」

「最高神」

「すみませんすみません、てか生まれてきてすみません」

「卑屈になりすぎっ!?! もっいって言ってるでしょ?」

どうやら天罰は無さそうだ。

「…わかりました」

そう言うと神様は少し、いやかなり顔をしかめた。

「敬語も禁止！！もっと友達感覚で話していいわよ」

「そうか、じゃあよろしく！！名前は黒龍 蒼真な！！」

「切り替え早っ！？…まあいいわ。こちらこそよろしくね。名前はカレン・エクシア・フリードよ」

すごい笑顔、てか可愛すぎる。

「了解。じゃあなんで俺がこの世界に来てしまったのか教えてくれ」

「ああそんなこと。理由は単純明快、私が呼んだからよ」

「えっ！？マジで！？」

「うん、マジで」

「なんのために？」

「私のお願いを聞いてほしかったから」

お願い？神様、しかも最高神からのお願い？ものすごい怖いんだけど…

「それってカレン本人じゃできないことか？」

「そうよ。基本的に神は世界に干渉できないようになってるから」

「うーん、まあまずどういったお願いなのか言ってくれないと

返答のしようが無いな」

「じゃあ説明するわね」

うなずく。

「今、あなたのいる世界とは違う世界がピンチなの。理由は、その世界にいる

偽神達にせがみとそこに住んでいる人間達のせいだね」

「ありきたりだな。しかし、その偽神ってなんなんだ？」

「えっと、偽神っていうのはそのままの意味で偽者の神、つまり偽りの神って

いうことよ」

「ふむ、つまり周りの人間達に自分達を神だと偽って、やりたい放題してる

ってことか？」

「そうよ。なかなか頭良いわね。じゃあ説明の続きね。その偽神達は、

人間達を騙して戦争を起こそうとしているの。戦争なんかしたら多くの犠牲者が出ることになるわ。それをなんとかして止めたい

の。

お願い、力を貸して」

ぐあっ！！目をキラキラ輝かし、さらに上目遣い。

正直、たまりません…

「いいよ、こんな俺でいいなら力を貸すよ」

「本当！！良かった…。じゃあとりあえず蒼真に力を与えないとね。どんな能力が欲しい？」

「もらえる能力の数は？」

「もちろん……ひとつだけ」

「1個だけかよッ……ケチ（ボソッ）」

「なんか言っただ？」

その笑顔が怖いです。

「いいえ、何も言っていないですよ」

「そっ…」

ふう、なんとかごまかせたな。

さて、どんな能力にしようかな？

どんな能力でもひとつだけ、ね。…ん？ってことは『アレ』を頼めばいいんじゃないの？

ものは試した。聞いてみよう…

「あのさー、なんでもひとつだけ能力くれるんでしょ？」

カレンが少しだけ怪訝な顔をする。

「ええ、そうよ」

「神に二言はないよな？」

カレンがさらにしかめっ面になる。

「そうよ、何回も言わせないで！」

俺は心の中でガッツポーズをした。

そう、なぜなら今から言う能力は…

「じゃあ『全知全能の力』を俺にくれ」

キターーーーーー！

そうこれですよ、コレ。この能力さえあれば無敵になれる。
いや、神になれるッ！！！

「え、ちよ、ええええええええッ！？ありなの、ソレ！？」

ほら見るよ、あのカレンの顔。真っ青だぜ。少し罪悪感があるが…

「神に二言はないんだろ？」

「くっ！？……しょうがないわね、私も約束しちゃったし。じゃあ能力を付与するわね」

そう言うと俺の胸（心臓付近）に手を添えてなにやら呟いた。
その瞬間に俺の中に膨大な力が入ってくる感じがした。

「はい、おしまい。その力の使い方はひとつの本にまとめたいわ。
頭の中で念じればいつでも出せるわよ。じゃあ、行ってらっしゃい」

その言葉を機に、また黒い穴が出てきた。

「おう、いつてくるぜ」

その会話を最後に真つ暗な穴に飛び込んだ。

神様との出会い（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

学生なので投稿が途切れ途切れになってしまつと思われませ

ご了承くださいませ

できるだけ早めに投稿できるように頑張ります

応援よろしく願います

でわまたノシ

またですか？ソウマさん…そしてお決まりですね（前書き）

2日ぶりですかね？

どうも、時間間隔がないレミリスです

今回はside形式を使用しました

一人目のヒロインも登場します

おかしいところがありましたも気にしないでください

では、お楽しみください

「めっちゃめっちゃ便利じゃん。十分、地図の代わりに使えるな。ええと、使い方は…」

探すとすぐに見つかる。どうやら俺や神様じゃないと使えないらしいな。

「ふむふむ、イメージは遠くまで思念を飛ばすようにする。

しかも無詠唱も可能か。さっそくやってみるか…。《サーチ》！！」

やってみると意外と簡単だった。遠くの町や人、近くにいる魔物まで見えた。

…ん？今、すごい重要なことが見えなかったか？

そう思っただけで振り返ると、半径5メートル以内に一体の狼がいた。

狼だっていつでも大きさが尋常じゃなく、成人男性30人分ぐらいの大きさだった。

こいつが魔物か…

「さてと、こいつで能力の練習でもするか」

さっき読んだ説明書のことを実践に使うときがきたようだ。

まずは、小手調べ。

「《創造》我が手に集え、闘士の魂」

そう呟くと西洋の両刃の剣が俺の右手におさまっていた。

さて、身体強化をしなくても大丈夫かな？

「一撃で終わるなよ？狼さんよ」

その言葉を機に狼が飛び掛ってきた。剣を構える。

牙が頭を捕らえようとした瞬間、剣が煌めいた。

「黒龍流剣 絶技 序の式 崩花」

狼はその勢いのまま上空に吹き飛んだ。上空で少しだけ滞空した時、狼は

爆ぜた。血が乱れる様は、崩れた花のようだった。

「やはり一撃か…。とんでもない威力だな」

…黒龍家には代々一子相伝で伝わる剣術があった。その強さは世界でも

トップクラスである。その剣術を蒼真は体得していた。

「さて、この狼どうしようか？」

よく見てみると、なかなか強そうだ。町に行けばこいつの素材を買ってくれるかも知れない。よく考えれば金まったく無いし。

「だけどこの大きさだと持ち運ぶのが面倒だな。何かいい方法ねえかな？」

とりあえず本をまた大雑把に読んでみる。

「おっ、これなんかピッタリじゃん」

それは《空間制御》のページだった。自分の空間を作り、一回作ればいつでも

その空間を出せるらしい…

「なになに、時空を切り裂くイメージで無詠唱可能…余裕じゃん。
《空間》 我的世界よ、顕現せよ！」

目の前の空間に思念を集中させる。歪み、そして裂けた。
その新しくできた空間に狼を投げ入れる。
狼を入れた後、裂け目が消えた。

「よし、じゃあとりあえず人でもさがすかー」

サーチで比較的近い人を探す。

一番近くて5キロか。ん？なんか知らんが、すげえ勢いで移動して
んだけど…。

しかも複数か。

さらに細かくサーチしてみる。

男3人と女の子が1人か。いや、待てよ。この状況から察するに…
やばい、早く行かないと！！

「《転移》 世界よ、我を運べ！」

その瞬間、周りの景色が変わった。見た目が幼い赤髪の女の子がい
た、つうか

走ってくる。…可愛らしいな。ってあれ？止まる気がないようなん
だけど…。

気づいたときにはもう遅い。

「ぐはっ！？」

走っている勢いそのまま突進してきやがった。しかも鳩尾に入りまし
たよ。

めっちゃ痛いんだけど…。

そしてそのまま俺に抱きついてきた。

やったね、役得だね。ってそんな場合じゃねえ!!

状況整理、状況整理…。

そう自分に言い聞かせて無理やり落ち着かせる。

「どうしたの？」

優しく問いかけてみた。

女の子は今にも泣きそうな顔だった。

「た、助けてください!! 奴隷商に追いかけています」

…まあ、予想通りの展開だな。

すぐそのあとに奴隷商達も追いついた。

女の子を庇うように後ろへ下がるように促す。

奴隷商は下品な笑みを浮かべている。

「へへっ、兄ちゃんよオ。その女をこっちにわたしてくれねえか。

痛い目見たくないだろ？」

「そうだぜ、3人相手じゃあ分が悪いつて。諦めてさっさとその

餓鬼を渡したほうが身のためだぜ」

女の子は不安そうにこっちを見つめる。

大丈夫だ、守ってやる。そう耳元で呟いた。

しかし、まだ不安そうだった。たぶん俺の身を心配しているのだろ
う。

くううううっ!! なんていい子なんだ。

あっ、別にロリコンじゃないんだからね、ホントだからね!!

「おい、なにポーっとしてやがる。さっさと渡せって言ってるんだろ
うが」

おっとアブナイ、アブナイ。危うく少しだけ旅立ってしまいそうになっ
てしまった。

「悪い、悪い。少しだけ考え事をしてただけだ」

「ほう、俺らの前でそんなに態度とっていいのか？てめえ死にてえ
ようだな」

その言葉に少し頭にきてしまった。おまえら、終わったな…

「てめえらのほうがよっぽど死にたがってるように、俺には見える
がね」

奴隷商達は一気に顔を歪めて、ニヤニヤ笑い出す。

「そおか、覚悟は決まったらしいな。たったひとりで勝てると思っ
たよ？くらえっ！」

奴隷商のひとりが短剣で俺の肩を狙ってきた。

「遅えよ、ウスノロ」

そう一言吐き捨てると同時に、その奴隷商に一発だけカウンターを
決めてやった。

奴隷商は20メートルぐらい吹っ飛んだ。

これだけ吹き飛ぶと気持ちいいな。

「なにいつ!?!」

残りの二人も驚いている。この隙にご退場してもらおうか。

「消えろ。《漆黒の雷鳴》」

漆黒の雷鳴（しっこくのらいめい）。

俺が考えたオリジナル魔法だ。出力を抑えれば人を気絶させるぐらいの雷が出る。

逆に言つと本気でぶつ放せば山がひとつ消し飛ぶだろうな…

黒い電撃が地面を走り、まともにくらった奴隷商達はその場に倒れた。

ところどころ焦げているが気にしない。

女の子は呆然としていた。

「な、大丈夫だっただろ？」

自分ができる最上級の笑顔でそう言った。

女の子は今の一言で我に返ったようだ。

「は、はい。その、ありがとうございます!すごくお強いんですねっ!」

ぺこりと頭を下げて礼を言ってきた。顔が赤い気がするが気のせいだろう。

「当然のことをしたまでだ。それにそこまで強くなかねえよ」

「そんなことはありませんよ!王国騎士団長ぐらい強いです」

ふむ、さっきの強さで王国騎士団長レベルねー。正直、一割も力出してないけどな。

まあ黙つといたほうがいいな、化け物扱いされそうだな。

「そうか…じゃあ素直に受け取っておこう。で、あのさ…君の名前まだ聞いて

なかったよな。名前なんていうの？」

「は、はい！私の名前はリーサ・ルイリスっていいいます。リサって呼んでください！

あのう…あなたのお名前はなんていうんですか？」

「俺の名前…ね。黒龍…じゃねえや。こつちだとソウマ・コクリュウってなるのか？」

まあ、ソウマって呼んでくれ」

「はいっ！わかりました！！」

リサはこれまた可愛らしい笑みを浮かべながら、元気に返事をしてくれた。

…何度も言うが、俺はロリコンじゃないぞ。ホントだぞ。

「んで、なんでこんなところで追われてたんだ？」

努めて笑顔で聞いてみる。

リサの表情が見ればすぐにわかるくらい暗くなってしまった。聞かなかった方が良かったか？

「別に答えたくなかったら言わなくてもいいぞ？」

「…いえ、お答えします。ソウマさんは命の恩人ですし、信用しています。」

だから聞いてください。私になにがあったのかを………」

リサ side

私が住んでいるところは、この森の近くにあるとても小さな村です。名はリード村と言います。リード村は治安が良くて、毎日平和な日々を

過ごしてました。しかし村人たちはその平和に慣れすぎていました。そんな時にあの奴隷商たちが現れました。私は運悪く見つかってしまい、

捕まってしまうました。大人たちが束になって戦ってみてもまったく歯が立ちませんでした。何人かの人が殺されてしまいました。

すごく怖くて泣きそうになりました。

そのままこの森に連れてこられました。なんとか隙をみて逃げ出すことができ、

私は全力で走り続けました。

そして、ソウマさんに助けてもらい今に至るわけです。

…話し終えてソウマさんの顔を見ました。

ソウマさんはすごく悲しそう、そして苦しそうな表情をしています。

たぶん私の胸中を察して悲しんでくれているんでしょう。

なんて優しい人なんだろう、と思いました。同時に、この人のことが気になってしまいました。

…これが恋なんでしょうか？ソウマさんを見ていると胸の奥が切なくなります。

ソウマさんは、かなり、否、すごくカッコいいです。
街を歩いていたら女性の方たちが絶対に振り向くだろう、と簡単に想像ができます。
たくさんライバルが増えそうだなあ。私はそう考えながらも、この人に一生ついていこうと決心しました。

蒼真 side

リサの話はだいたい想像ついてたが、実際に聞くとかなりのショックを受けていた。表情に出してはいけない、と思ってもやはり無理だった。とにかく何か言わないと…

「…ごめん。無遠慮に聞いてちゃって…」

「別にもう大丈夫ですよ。それにソウマさんがいますし…」
…よくそんな恥ずかしいセリフが言えるな。少しだけ顔が熱くなっ
てしまった。

「そうか？ならいいんだが…。じゃあそのリード村まで送るよ。
両親も心配してるだろうし」

「はい、お願いします」

「で、リード村はここからどのくらいの距離なんだ？」

そんなに遠くなければ転移して行けるし。ていつかそっちの方が楽だ。

「えっと、南西に20キロぐらいですね。なんでそんなこと聞くんですか？」

「ちょっと待ってて。すぐにわかるから…」

そう言ってから頭の中で南西20キロにある村をサーチで探す。リサの言った通り、そのぐらいの距離に小さな村があった。

「さて…リサ、ちょっとこっちに来てくれないか？」

「えっ！？は、はい！」

リサは少し驚き、顔を赤らめながらも近づいてきた。そんなに驚くことだろうか？

そしてリサの手を握る。さらに顔を赤くしたが気にしない。

「じゃありさ…ちゃんと掴まってるよ？…《転移》！！！」

次の瞬間には目の前に木製の門があった。

「おっ、着いたようだな」

後ろを振り返るとリサが青い顔をして固まっていた。

さっきまで赤かったのに急に色が変わるとは…。ある意味すごいな。リサの肩を軽く揺する。

「おい、リサ？着いたぞ」

俺の一言で目が覚めたようだ。はっと我に返った。
直後、リサが俺に鬼気迫る表情で迫ってきた。

「ソウマさん！…どうやってここまで来たんですか!？」

「どつやってって。普通に転移魔法でだけど」

「転移魔法なんて宮廷魔術師でさえも使えませんよ!？」

…失言だったようだ。まさか転移魔法がないなんて。

RPGじゃ普通にあるからだれでも使えると思ったんだけどなあー。

「まあ、今は気にしないでくれ。明日話すから…それよりもメシだ、
メシ。」

腹減ったあー」

「はあー。今日はしょうがないから見逃しますが、明日ちゃんと話
してくださいよ?」

「おう!…って、あああああああああああ!?!?!
「?」

「なっ、ど、どつしたんですか!？」

いきなりの大声にリサはかなり驚いているようだがそれどころじゃ
ねえ。

「……………食べ物を買う金がねえ……………」

リサが一瞬呆けた顔になる。しかし、すぐに笑顔になった。

「クスッ、私の家に泊まってください。お金は要りませんから……」

その瞬間、蒼真の表情が世界の滅亡を見たような顔から、ぱあっと明るくなる。

…女神様や。この子は女神様に違いない。少なくとも二回もスカイダイビングさせられたアホ神よりは……。

「ありがとう、お礼に何でも一つだけ願いを叶えてあげよう。まっ、できる」

「範囲でだけどな」

その言葉にリサは少し反応を示した。顔も少し赤くなってるが、いつもどおりスルーの方針で。

「それ、本当ですか？」

「ああ。ホントだ」

それを聞いたりサは心の中でガッツポーズをしたことを蒼真は知らない。

蒼真は食欲に溺れていたことをあとで後悔するだろう。

「じゃあ明日までに考えておきますね」

「わかった。それじゃありさん家まで案内よろしく！」

「はい、了解です」

蒼真、リサ御一行は仲良くルイリス家に向かった。

またですか？ソウマさん…そしてお決まりですね（後書き）

長いような、短いような…

まあ、内容が濃ければオーケーですよね？

（内容も薄い気がしますけどねww）

今回は戦闘描写がありましたか、完全に作者の力不足です
なんとか改善したい（ノー＜）

もしかしたら早めに投稿できるかも!？

ではこのくらいで、失礼します

ついにこの時がきたか…by狼(前書き)

どうも、今日は雪が降って寒かったので家の中にいたレミリスです
(ほとんど家にいますけどねw)

前回に引き続き3話目の投稿です!!

今回は戦闘はありません。平和な金銭やり取りですwww

ではどうぞ

ついにこの時がきたか…by狼

あの後、リサと一緒にルイリス家に向かい夕食をご馳走してもらった。

最初は警戒されたが、リサが誤解を解いてくれた。

父親がカーク、母親がリーシアと名前らしい。

夕食を食べさせてくれたことからわかるだろうが、ものすごく歓迎された。

俺が遠慮なく食べているときにリサが両親となにやら話していたが、お決まりのスルー精神でひたすら食べ続けた。カークさんと意気投合し、

夜遅くまでいろいろ（内容は長くなるので省略する）と語り合った。

さすがに初めての戦い、しかも連戦だったので疲れてしまった。

さっさと寝よう…。そう思い自分の部屋に戻り、床に就く。

すぐにぐっすりと眠れた…はずだった。

気づいたらカレンと出会った場所にいた。

夢か？夢なのか？

「確かに夢だけど、正確には違うわよ」

……………俺の背後を取るのが好きみたいだな、アホ神さんよあ？

「誰がアホ神よ！！」

おっと、そういやあ心を読めるんだっただな…。

以後気をつけよう。

「つて、おまえが二回も俺にスカイダイビングさせたからだろうが
っ!!」

「あら？お気に召さなかったかしら？」

「当たり前だろ!!…ハア、もういい。これ以上言っても意味ねえ
だろ…」

「分かればいいのよ、分・か・れ・ば！」

…なんかムカつく。

「で、俺に何か用か？」

「そうなのよっ!!…さっき、今蒼真がいる世界の神に苦情がきてね。
なんでそんな人間がこっちにいるんだ!…つて、あんまりうるさ
く言ってきたから

その神、存在ごと消し飛ばしちゃった…テヘッ」

「テヘッ、っじゃねえよ!?可愛く言っても、やってることハンパ
ねえからな!!!?」

「まあ消しちゃったのはしょうがないのよ。私に逆らったんだもの。
このぐらいの天罰なんて当然よ!」

なんて理不尽な最高神だ。心の中で同情します、名前も知らない神
様…。

「で、神様不在ってやばいんじゃないの?どうすんだ?」

「アンタがなればいいのよ」

…なんだって？

「だ・か・ら！―！蒼真がその世界の神になればいいのよ！―！」

「え？…ちょ、おまつ！？それってダメだろ！？？」

そんなもんになっちまったらいいよ人外になっちまうじゃねえか！？

そんなんやダよ、俺。

「拒否権を発動する！―！」

「もちろん無視」

だろうと思ったよ！―！

「…ハア、しょうがねえな。でも、めんどくせえのはパスするからな」

「そこらへんは大丈夫よ。神なんて肩書きだけみたいなものだから！―！」

そこで胸を張っちゃったら本格的にダメだと思っぞ？

「わかった。じゃあとつとと終わらせてくれ。早く静かに寝たいんだ」

「そう。じゃあちょっとしゃがんで」

「どうか？」

言われた通りに少ししゃがむ。するとカレンの掌が俺の後頭部に触れた。

ああ、神様になるんだなと思考していると数秒もしない内にカレンの手が離れた。

「…ふう、これで終わりよ。階級は私と同じにしといたから」

「わかった」

もうつつこまない、そう心に決めた。

「前よりできることが増えたはずよ。もうあなたに勝てるの私ぐらいしくないないん

じゃないかしら？」

「さあ…。で、新しく何ができるようになったんだ？」

「そうねえ、能力の付与が新しくできるようになったのと、生命を創ることが

できるようになったと思うわ。もちろん、普段の身体能力と魔力が大幅に上がるわね」

…ガチでチート（笑）。俺は本当に神になったんだな。

できるだけ能力は隠していかないと。…崇拜されたりし始めたらと考えると笑えない。

「そっか…。じゃあまた何かあったら呼んでくれ」

「わかったわ。じゃあまたね」

視界が真っ暗になった…

翌朝、朝日が目に入り眠そうに起き上がる。

フラフラとリビングみたいなどころに向かっていると、カークさんに声をかけられた。

「おお、起きたか。おはよう」

カークは蒼真とは違い、もうスッキリと起きているようだ。

「はふっ、おはようございます…zzzz」

もはや立って寝れそうな雰囲気醸し出している。

この状況を見ればわかるだろうが、蒼真は普通の人より人一倍朝に弱いのである。

「ハハハッ、まだ眠そうだな。そんなんじゃ娘を任せられないぞ？」

カークは笑いながらそう言う。

昨日あんなに遅くまで騒いでいたら睡眠不足になるのは当たり前だろうが…

…あれ？今、聞き捨てられない言葉を聞いたような？
まあ気のせいだろうと忘れることにした。

顔を洗い、朝食を頂く。

うん、美味しい。米は無いが、元からパン派だったので異世界に来てあまり食生活は変わらない。

食べ終わりそろそろ旅に出る準備をする。

いつまでもお世話になりっぱなしじゃまずいし、なにより偽神を退治しなければ

ならない。そのことをリサに言うと、「じゃあ昨日から考えていたお願いを聞いてください」

と言われた。はっきり言って完全に忘れていた。まあ、できる範囲でって言ったから

そんなに無茶なお願いではないだろうと高をくくっていた。

「で、何にしたんだ？」

「ええと、ですね。……………私も旅に連れて行ってください!!」

「…マジで？」

「マジです」

…予想外デース。って、アブナイアブナイ。驚きのあまりなってエセ外国人になっちゃった。

「よく考えてみたほうがいいぞ？親の許可もいるだろうし」

「昨日の夜話したら、お父さんもお母さんも許可してくれました」

ああ、あの時か。つつか、さっきのカークさんとの会話でもそんな感じのこと

言われたな。しかしだな、俺と一緒に旅をするっていうことは危険な目に遭う可能性が高い……いや100%危険だ。どうしよう？こつなったら脳内会議を開こう。

(今回の旅は危険すぎます。まだ小さい女の子には無理だと思われ
ます)

(その意見、異議あり！！俺が守ればいいだろっ！！)

(敵の数が多くて守りきれなかったらどうするんだ！？責任をとれるのか！？)

(ぐっ……。……。そ、そうだ彼女に能力を付与すればいいじゃないか！！)

(た、確かに。それなら納得できる)

(では、リーサ・ルイリスと一緒に旅に連れて行くことに決定！！)

……。アホだ。俺は何をやっているんだOTZ

ま、まあ、とにかく決まったな。だけど、リサに少しだけ事情を話さないといけないな。

旅の目的とかわからないまま一緒に来るほどリサもバカじゃないだろう。

「……しょうがないな。俺もなんでも一つ願いを聞くんて言っちゃったし。」

一緒に来るか、リサ？」

「は、はいっ！……！」

すげえうれしそうだな。その笑顔が見れたから良しとするか。

「じゃあ少し俺の話聞いてくれるか？一緒に旅に行くのに大事なことなんだ」

「はい、聞きます」

俺は今までのことを話した。…もちろん神になったっていうのは隠したぞ。

絶対変な奴だと思われる。すでに手遅れかもしれないが…

「…わかりました。でも、もう隠し事はしないでくださいね？」

「モ、モチロンダ……！」

現在進行形で隠してるから冷や汗ものだったぞ。てかすぐにバレそうだな。

自分のことながら嘘つくの下手すぎないか？

ほら見る、リサが疑いの目で俺を見つめてるじゃねえか。

「…じゃあお父さんたちに今から行くことを言ってきますね」

聞かないでくれたことに感謝、感謝です。

「俺も行くぞ。お世話になった礼も言いたいからな」

「了解です」

朝食を食べたところに行くと、カークさんとリーシアさんが待っていてくれた。

「どうやらわかっていたらしいな。」

「今までありがとうございます」

「こちらこそ、娘をお任せします」

そうリーシアさんが返事をしてくれた。

「では、いってきますー!」

「」「」「いってらっしゃい」

気持ちよく見送ってくれたルイリス御夫妻。

俺は心の中でずっと感謝していた…

そういえばこの世界のことあまり知らなかったな。リサに聞いてみるか。

「なあリサ、この世界のこと教えてくれないか？」

「いいですよ」

その後リサにいろいろと教えてもらった。

まず、今いるこの大陸の名前はレイフォン大陸というらしい。

レイフォン大陸を真っ二つに割るように二つの国があり、

西にグリズール帝国、東にレギマリア王国が領地を奪いあっている。

俺がいるのは王国の方だ。リード村はレギマリアの中でもさらに北東に位置する。

王国は魔法に優れており、帝国は武術に優れているらしい。

それだと王国のほうが有利なのではと考える人が多いと思うが、王国は

兵力50万なのに対し帝国は100万を超える兵力を持っている。

それでちょうど良いぐらいに均衡を保っている。というのがリサの説明だった。

「ふうん、でもこのままだったらレギマリアが勝つんじゃないか？」

「王国側もそう思っていたらしいんですが、近年帝国側の動きが怪しくなっている

そうです」

「怪しく…ね」

「どうしたんですか？」

「リサには話したlaro？偽神のこと」

「はい、聞きました」

「たぶんだけどさ…帝国側に偽神がいて戦争に干渉してきているのかもしれない。

裏で何か企んでいるんだと思う」

「確かに、それだと辻褃が合いますね」

「laro？だけどどうすれば偽神のことを王国側に教えられるんだろ

う？

おそらく王様クラスの偉い人に会わないとダメだろうし…」

さすがに王宮に殴りこみに行くのはヤバイだろ、うん。

「…じゃあ王宮に殴りこみにいきましよう！！」

「ヤバイ案きたっ！？それはさすがにダメだろ！？」

「実は合法で殴りこんで王様と会う方法があるんです…フフ」

なんか急にリサが怖くなってきたんですけど…。リサの将来がとても不安だ。

「ど、どうやってたら王様と会えるんだ？」

「ギルドで名を上げ二つ名を貰い、王様に決闘を申し込むんです！！
この国では王様と決闘し、勝てたらなんでも言うことを聞いてくれるらしいんです！！」

リサの目がキラキラと輝きだした。というか、なんていうご都合主義。

それしか方法が無さそうだな。正体をバラす必要もなさそうだし。

「…ギルドか。よし、じゃあとりあえず目的地は決まったな。さっそく向かおうって

言いたいけど、資金を集めないと。金が無きゃ宿にも泊まれんし、メシも食えん…。」

どこかに魔物の素材を買い取ってくれるやついないか？」

「それならちょうど商人が来てるので、その人に買い取ってもらいましょう」

「そうだな」

即行で商人がいるところに向かう。

「どうも、何を売ってくれるんですか？」

「ああ、先日倒したやつなんだが…」

そう言つて空間魔法を使い、先日戦つたでつかい狼を出す。
リサと商人の二人は、突如裂けた空間にも驚いていたがその空間から出てきた狼を見たときさらに表情が変わつた。

「「キ、キングウルフ!?!」」

「ん?知ってるのか?」

その質問に慌てた様子のリサが答える。

「知ってるもなにも、このへんの魔物たちの頂点に君臨する魔物の王ですよ!!!!」

ギルドの方でも危険度AAクラスに指定されています!!」

「そうなのか?そんなに強くなかつたと思つけど…」

現に蒼真は一撃で葬っているので当然の疑問だった。

「ソウマさんのこと強い、強いとは思ってたけどまさかこんなに強かったなんて…」

リサは驚きのあまり聞いてないようだ。
まあ本来の目的を達成するでしょう…

「こいつ売ると、どのくらいになる？」

「え、ええと…。き、金貨350枚になります」

…そういえばこの国の通貨についてまだ説明されてねえじゃん。
って言ってもこのぐらゐの魔物じゃ別に少ない価値で買われてもい
いぜ。

「じゃあその金額でよろしくー！」

「わかりました、少々お待ちください」

待っている間にリサを正気に戻すか…。まだ何かぶつぶつ言ってる。
がる。

「もう、このままじゃさらにライバルが増えちゃいそうだなあ…」

「おーい。リサー、こっちに戻ってこーい」

「ひゃいつ！？な、なに！？何か用ですか？」

何この可愛い生物。お持ち帰りしちゃいたくなる、ってまた危ない
こと

考え始めちまう。煩惱退散、煩惱退散：

「いや、あのさあさっきのデカイ狼なんだけどさあ。なんか金貨350枚で

売れるらしいぞ?」

「き、金貨350うっ!?それだけあれば一生遊んで暮らせませすよっ!!!」

金貨10枚あれば家が買えるんですよ!!!」

「そんなにあるのか!?!?!でも、そんなにいらなからリサン家に戻ってリーシアさんに

あげるかあ。お世話になったし」

騒ぎまくっていると商人が金貨を仕分け終わったらしく俺に話しかけてきた。

「どうぞ、金貨350枚です。ご確認してください」

「めんどくせえから確認なくていいや。また会ったら何か売りに来るから」

「わかりました。その時までにお金を仕入れておきますね。あのお名前を

聞かせて頂いてもよろしいでしょうか?」

「別にいいぞ。俺の名前はソウマ・コクリュウって言うんだ。じゃあまたなー!!!」

そう言っ商人と別れた。そしてルイリス家に戻り金貨150枚ほ

ど渡し、
ギルドへと向かった。そこで予想外なことが起こることも知らずに
…。

ついにこの時がきたか…by狼（後書き）

まさかの序盤雑魚がこの金額ww

出てきた当初は名前もありませんでしたし…

まあ、名前つけても適当な扱いでしたね

（さんざんな扱いな、かわいそうな狼さんですw）

次回はギルド編へ続く！？と思われませんが

作者の力不足で話が進まない可能性が高い…いや100%だbyソ

ウマさん

では失礼いたします

あれ？ギルドの回だったよね？（前書き）

今回はギルドの回だったはず。

なぜこうなった・・・

新キャラ登場します

一応ギルドも出てきます

あれ？ギルドの回だったよね？

「なんでこんなことになってるんだ？」

全身黒づくめ一人の青年が問う。

「ソウマさんがやったんでしょ！」

もう一人の少女が返事をする。

目の前には巨大な魔物がいた。いろいろな物語に登場するある意味一番有名なモンスター。

寧猛そうな牙。太く長い尻尾。そして背中にある大きな翼。聡明な方々ならもうお気づきだろう…。そう、『ドラゴン』である。なぜこうなったのか、その話をするには時間をさかのぼる必要がある。

1時間前…

ルイリス家に大金を渡してからすぐにギルドに向かった蒼真とリサであったが、

異世界からきた蒼真の格好は嫌でも人目を惹いてしまう。

その打開策としてリサがリード村にある服屋みたいなもの（おそらく防具屋だろう）

に寄り服を選んだ。

その結果、全身黒を基調としたカッコイイ系の服に決まった。

上着みたいなのが膝下ぐらいまであり、蒼真は戦闘の邪魔になる

だろうと思っていたが、

案外動きやすかったので良しとした。デザインはなかなか良く、気に入っていた。

リサも自分の服を選んでいた。リサは最終的にオレンジを基調とした魔術師みたいな

ローブに決まった。

周りから見ると、それはもう反則的に似合っていた。

蒼真が

「似合ってるし、すげえ可愛い」

と言ったことで買うことを決めたらしいが、もちろん言った本人は気づかない。

ついでにネックレスも買い、プレゼントした。ネックレスをプレゼントしたのには

ちゃんとした理由がある。その理由とは、俺の神様能力《能力付与》を使って

ただの装飾品だったのを魔法アイテムにして身に着けてもらうためである。

さすがに能力付与は神様レベルでないとできないから、着けてる本人には内緒で

魔法を施した。

付与した能力は『絶対防御』と『魔力上昇』の二つだ。

絶対防御とは物理、魔法、その他諸々の攻撃を自動的に大幅に遮断される能力である。

魔力上昇はそのままの意味だ。常人より少し高くなるようにした。た。

しかしこの二つの能力はネックレスを身に着けてないと発動しないので

絶対にはずさないように言いつけといた。もちろん破壊されないようにも

しといたので安心だ。

ちなみにリサは魔法を使えるらしい。奴隷商に襲われたときは恐怖のあまり

魔法を使えなかったと言っていた。

「さて、服も買ったことだしギルドに向かうかあ…ってあれ？そういえば

ギルドどこにあるのかわらねえや」

「クスツ、リード村からさらに南西に行ったところにある商業都市ガイダンって

いうところにありますよ」

リサはさつき褒めてもらったので、いまだに上機嫌なままだ。ずっと笑顔である。

「じゃあさつそくガイダンに向けて出発！！」

「はい！！」

徒歩で歩くこと30分。

さつきから同じ景色ばかりで、いい加減うんざりしてきた。

そこでリサにちょっと水を汲みに行ってもらい、その間に実験をすることにした。

神様パワーの能力である《生物創造》を使い、新しい仲間を創るという実験である。

「さて、どついうのがいいかな？」

ある程度考えてみたら、いざとなったらリサを守れるくらいの強いやつを創ることにした。

「やっぱり強い奴って言ったらドラゴンだろ。よし、やってみるか！
《生物創造》我が名の下に生まれろ、新たな者よ！！」

直後、目の前に光り輝く物体が現れた。これがドラゴンの素か？
そんなことを考えていると、その物体が割れて中から小さい白いドラゴンが出てきた。

「…小さいな、一気に成長させてあげよう」

俺が念じるとそのドラゴンに雷が落ちた。大丈夫だろうか？
すぐに心配が杞憂に終わった。見る見る内に大きくなっていく。
5分後には少し大きい一軒家ぐらいの大きさまで成長した。

「……………今度はでかすぎるよな」

こんなの連れて街なんかに行ってみたら、すぐに阿鼻叫喚の地獄絵図に変わるぞ。
比喩じゃなくてマジで。

少し思考にふけていたらリサが帰ってきた。リサは最初はすごく驚いていたが、

俺が召喚魔法で呼んだと説明したら

「ホントにソウマさんったら規格外なんですから…。ドラゴンなんて普通は

召喚できませんよ」

とか言われちゃいました、ハイ…。まあ、人外とか言われるよりは
まだ幾分か

ましだろつと無理やり自分を説得する。
そして現在に至るのである…

「なんでこんなことになってるんだ？」

「ソウマさんがやったんでしょ！」

ふむ、たしかにそうなんだが…どうしようか？人ぐらいの大きさに
できれば

いいんだけどなあ。あつ！！そっだあの方法があった。

「よし、ちよつと危ないからリサは下がっていてくれ」

その言葉にリサは素直に応じた。

さて、能力付与を使うわけだがどうやったらバレずに済むのか…。
また少し考えてある一つのことを考え付いた。

まず自分の服に能力を付け加える。増やすのは『念話』だ。

これによりドラゴンが話せなくても直接会話をすることができる。

(おい、ドラゴンよ。聞こえていたら返事をしてくれ)

(ソウマ様か？なにか用か？)

…ふむ、声からして女性かな？

口調と呼び方が合っていない気がするが…慕ってくれているので問題
ないな。

(今からおまえに新しい能力を付けるが、そのことを俺の後ろにい

る女の子には

話さないでくれ。わかったか？)

(了解した。神に誓って絶対に話さない)

それ、俺に誓っているのと同じだけだな…。まあ、そんなことはどうでもいい。

(じゃあおまえには『変身』という能力を付与するから。それを使って俺たちの

ような人間の姿に変身してくれ。頼んだぞ)

(わかった)

そこで念話を止めた。ドラゴンの方を見てみるとすでに人間の姿になっていた。

白いロングヘアで肌も真っ白だ。かなりの美人だった。

服装も白を基調としたワンピースだった。

後ろからトテトテと走ってくる音が聞こえる。後ろを振り向くとリサが

すぐ傍にいた。

「あの、ソウマさん。ドラゴンって人間の姿になれるんですか？」

…当然の疑問だろう。絶対にそのことについて聞かれると思い、すでに頭の中に回答を用意しておいた。

「ああ、そのことなんだけどな。俺が召喚したのは特別なドラゴンだったわけで、

普通のドラゴンは人間にはなれねえよ」

少し無理があるが、このくらいは許容範囲内だろう。

「はあ、そうなんですか」

ほら、信じたぞ。多少の罪悪感があるが…

「じゃあ名前はなんていうんですか？」

…は？名前？……………どうしよう、考えてない。早く適当に…なんて
そんなテキストに

人—（？）名前を考えちゃだめだ。…考えろ、考えろ……………よし！
これにしようー！！

「…エリザっていう名前だ」

「エリザさんですね、わかりました」

よし、名前も決まったことだし。事前に教えないと…

（おーい？おまえの名前はエリザに決まったぞ。こっちにきてくれ、
紹介するから）

（了解した）

念話が終わると同時に俺の目の前までエリザが来ていた。

おいおい、もしかしたら俺と同じぐらい速いんじゃないか？

「…紹介しよう。こっちが俺の仲間のリサだ。で、こっちがドラゴ

ンのエリザだ」

俺の目の前で二人が握手する。うむ、仲良きことは美しきかな。

「エリザだ、よろしく。…先に言っておくが、ソウマ様は渡さないぞ？」

「リサです、よろしくお願いします。…こっちだって負けませんよ？」

アハハ、ウフフと不気味に笑い合っている。…仲いいんだよな？そうだよな？

多少の不安が残るがとりあえず仲間が一人増えたことを素直に喜ぼう。

…二人が怖くて、ちょっと後ずさりしてしまったのは内緒だ。

ちなみにエリザの服にもリサと同じような能力を付与し、創造で作った白い剣を与えた。

夜になってもガイダンに着かなかったので野宿をすることになった。寝るときに、見張りを俺がするから二人は寝ていてくれと言ったら二人が張り合うように「一緒に見張りをする」と言い出してきたから、

結局俺が魔法で結界を張って3人で寝た。

3人で寝たと言ってもやましい事は何一つ無い。

少し寒かったから冷えないように3人で寝たんだ。

ホントだぞ？

若さゆえの高ぶる気持ちを抑えるのに苦労したが…。

早朝に俺たちは出発した。

今日中に宿を探し、ギルドで登録をしたかったからだ。
昼になる前に到着した。

「じゃあっ！！やっと着いたあ…。ここまでの道のり、長かったぜ
…」

「クスツ、ホントですね。ではさっそく宿を探しましょうか」

「ああ、めんどくせえから魔法で探す。…《サーチ》！！」

おっ、発見。人の入り具合を見るとなかなか良さそうだ。しばらくは
この街が拠点になるだろうし、いちいち他の宿を探すのもめんどい
ので
その宿へと向かう。

「はい、確かに料金は頂きました。ごゆるりと過ごして行ってくだ
さい」

この宿の若女将だと思われる人に金を渡して部屋を二つとり、ギル
ドに

行くことにした。ギルドはこの宿の近くにあり、簡単に見つかった。
すぐ特徴的なデザインだった。看板に人と魔物が書いてあり誰でも
わかりやすいように屋根が緑一色だった。

中に入るとガラの悪そうな無駄に筋肉がついてるゴリマッチョがた

くさんいた。

もちろん女性もいたぞ。

ゴリラ共のいやらしい目線――（なぜか俺にも感じる気がするのだが……）を無視して
受付に到着した。

「今日はどのようなご用件でしょうか？」

丁寧な口調でこちらに聞いてくる。

「登録をしたいんだけど……説明してくれないか？」

微笑みながら優しく聞く。

「は、はい。では、説明させていただきます」

いつも通り気のせいだろうが、受付嬢の顔が赤い気がする。
血行が良いのだろうと推測する。
すると後ろから

「ソウマさんのあれって、天然だよね」

「ああ、しかも鈍感だしな。最悪のパターンだ」

などと聞こえてくるが無視します。俺の悪口だと思っから……。
あれ？おかしいな？目から汗が……

「お客様、どうかいたしましたか？」

どうやら受付嬢に心配をさせてしまったようだ。

このままだとおかしな人だと勘違いされてしまう。

「いや、大丈夫だ。説明よろしく！」

今度は無理やり笑った笑顔で返事をする。
さらに赤くなつた気がする。が、スルーする。

「では、始めにこの紙に名前と出身地を書いてください。
その紙はギルドカードを作る際に必要になります」

出身地か。…リード村でいいだろう。他の3人も俺と同じように出身地を
書いた。それを受付嬢に渡す。

「はい、確かにお預かりしました…ってあれ？もしかして

『あの』ソウマ・コクリユウ様ですか？」

「『あの』って言われても、どれなのかわからないが…。リード村
出身には俺しか
ソウマなんて名前いないと思う」

そう答えた直後、受付嬢の表情が変わった。

「か、感激です！！まさかお会いできるなんて！！」

急に大声に変わる。ちよつとポリウム抑えてくれないか？
周りのゴリラさんたちが奇異の目でこつち見てるから…

「…君に会つたの初めてだと思っけど」

「そうですね。でも今ギルドで噂になっているんです。

あのキングウルフをたつた一人で倒したすごく強い方がいるって

…」

なんで知ってんの！？あの時にいたのリサと商人ぐらいじゃん。リサはずっと俺と一緒にいたから…ってことは…！！

「…あの商人か。口止めしとくべきだったな」

「すみません、しゃべっちゃいました」

俺が呟いたその時後ろから聞き覚えがある声が出た。

振り向いてみると、そこには格好は違っていたがリード村にいた商人がいた。

驚きですぐに言葉が出てこない…

「え！？なんでこんなとこにいるんだ？って顔をしていますね」

商人が勝手に俺の表情を読み取る。

「…まあそう思うのは当たり前だろ？じゃあ改めて聞くけど…
なんでここにいるんだ？」

商人がニヤリと笑う。どうでもいいが悪役みたいだぞ？

「それはですね…。ここのギルドマスターをやってるからですよ」

「マジかよっ！？…だってアンタ、リード村で商人やってたじゃないか。」

「おかしいだろ」

「それは趣味みたいなものですよ。本業はこっちです」

…頭が痛い。なんでこんな奴がギルドマスターなんだ？
はあ、とため息をついているとギルドマスター（自称）が話を続けた。

「まあ、それは置いて…。まだ説明の途中でしよう？
受付嬢が困ってますよ？」

誰のせいだっ！？とツツコミを入れたかったがマジで受付嬢が泣きそうな顔を

していたので素直に従う。再び説明が始まった。

「で、では次にギルドランクの説明に入らせてもらいます。

ギルドランクは全部で F、E、D、C、B、A、AA、AAA、

S、G の

10種類あります。Gランクが一番上で、GODを表しています。
現在一番強いと言われている方はSランクの『炎神』の二つ名をもつキール様です。

ランクを上げるには自分と同じ依頼を20回成功するか、一つ上のランクの依頼を

10回、二つ上の依頼を5回、三つ以上上の依頼を1回成功すれば上がります。

ランクS以上の依頼を成功すれば一気にSランクまで上がります。
最初はFランクからのスタートになります。ソウマ様方もFからです」

ギルドランクの説明が終わるとギルドマスター（笑）が
話に割り込んできた。

「そのことなんですけどね。…ソウマさんはキングウルフを一人で討伐したので

ギルドマスターの権限でAAランクからでいいですよ」

「マジかっ!？」

「マジです」

心の中でさんざんバカにしたことを謝っておこう。なかなかいい奴じゃないか。

最初はいけ好かない奴だなあと思ってたしな。

ん?そういえば二つ名をもらわなければいけないんだっけ?

「なあ、二つ名ってどうすればもらえるんだ?」

それに対してギルドマスターが答えた。

「二つ名ですか?多くの依頼を成功し続ければ必然的にもらえますが…。」

それは急がないとダメなんですか?」

「ああ、できれば早めにもらいたい」

偽神たちがいつ動き出すかわからないからな。早めにもらえるのならすぐにもらいたい。

「そうですね。でしたらこの依頼を達成してみてください。」

一気に有名になり、二つ名をもらえますよ」

そう言って一つの依頼が書いてある紙をもってきた。

その依頼を見た瞬間、受付嬢が絶句した。

「なになに…魔剣士グリモアの討伐？…グリモアってどんなやつなんだ？」

「わ、私が説明いたします」

受付嬢が噛みながらも説明しだした。

「…魔剣士グリモアとは、各地方で目撃されているランクG相当の正真正銘の

化け物です。グリモアが現れたら逃げるしかないと言われていま

す。
今までSランク級の歴戦の強者たちが戦いを挑みましたが、まったく歯が立たず

現在も野放しにされています。…はつきり申し上げますと無謀だと思われませんが…」

少し考える。

「…いや、その依頼を受けよう。その依頼を成功すると俺以外もランクが上がるのか？」

「はい、同様に上がります」

「わかった。では、どこに現れたのか教えてくれ」

「はい。グリモアは現在ここから南に10キロにある山岳地帯にいるようです。

すでに近隣に住んでいる住人は避難し終わっています」

「了解。じゃあさっそくいってくる」

そう言い二人を連れてギルドを出た。向かうは山岳地帯。
クククッ、待ってるよグリモア。俺様の踏み台にしてやる。

あれ？ギルドの回だったよね？（後書き）

最後のはフラグですw

そして次回、回収されます

蒼真の性格が所々変化してるのは、

作者のテンションに関係して・・・仕様です（笑

今回は戦闘がありませんでしたが、次回は絶対にあります
というか無きや作者が困ります

ではこれにて

感動の場面だ……たぶん(ボソッ)(前書き)

前回の投稿から1週間経過…

怒涛の3連続投稿を終えて、真っ白に燃え尽きてました

これからは1週間に1回程度になりそうです
多くても2回ぐらいですね

テストも近いですし…まあ、勉強しませんがww

感動の場面だ……たぶん(ボソッ

俺たちは無事に山岳地帯に着き、グリモアらしき魔物を見つけた。見つけることができたのはいいが…

「おかしくね？あの大きさ」

そう遠くから見たときも思ったのだが、近くでみたらとんでもなかった。

余裕で100メートルぐらい超えてるんだけど。剣も40メートルぐらいあるし。

簡潔に説明すると、戦国時代の武将がそのままでかくなつた感じだ。

…どうやって倒せばいいんだよ？

《漆黒の雷鳴》を全力でぶっ放してもいいんだけど、アレやるとグリモアが

消し飛びそうなんだよ…。素材も取れないし、化け物扱いされそうだ。

大きさがまだ10メートルぐらいだったら黒龍流剣の絶技を使って倒せたのに…。

こつちの世界に来てから作った秘奥義もあるんだが、確実に人外扱いされる。

「(もう俺の正体バラすしかないのか?)」

…いや、もし俺が神様だと知ったら周りのみんなが離れていくんじゃないか？

そんなのはもちろん嫌だが、世界の命が懸かっているんだ。

ううむ…と悩んでいると意外にもリサから予想外なことを言われた。

「…もう…！…いつまでボーツとしてるんですか！？はやく倒してしましましょう…！」

「ツ…？…そつだよな。こんなところでウジウジしていてもしょうがない…！」

そつだ、そつだよ。こんなところで悩んでいたら、こいつよりも強い—（推定）

偽神にも勝てないだろう。

もう正直に話そう。この二人はそれだけ信用できる仲間だ…！！！！！！

「…みんな、今から言う事をよく聞いてくれ」

俺のいつになく真剣な態度に素直に従ってくれた。

「リサには話したけど俺は異世界から来た。だけど、それだけじゃないんだ。

…俺はこの世界の……神様なんだ」

俺は目を閉じた。静寂が身を包む…と思っていたがクスクス笑う声が聞こえてきた。

目を開ける。その視線の先には、こちらに向けて優しく微笑んでいるリサと

エリザがいた。

「クスツ、いまさら何言ってるんですか。そんなこと前から気づいてましたよ。

いつ話してくれるか楽しみにしてたくらいなんですから」

「私なんてソウマ様が創ってくれたんだぞ？生物を創るなんて神様以外に

誰ができるのか教えて欲しいものだ」

…気づいてたのかよ。俺の一人相撲だったわけだ…。

二人のそんな様子を見ていたら胸の中が温かい気持ちでいっぱいになり、

少し涙が零れた。

「…ありがとう」

自然と口が動いた。

その言葉で三人が笑顔になる。

…俺はこの二人を、世界を守る！！

そう改めて決心をした。

「さて…。とつとつ倒しますかぁー」

それに二人は大きくうなずいた。

「さて、あの巨体をどう崩すかだが…。二人でなんとかアイツを一時的に

止めることはできるか？その間に、俺がグリモアに有力な攻撃の準備をして

一撃を与える。これが当たれば一撃で倒せるはずだ」

「は、はい！なんとかやってみます！！」

「ああ、がんばってみる」

「よろしく頼む。…じゃあ行くぞ!」

「オー!!!」

二人がグリモアの足元に向かった。

リサが加速の魔法を使ったらしく、エリザとリサのスピードが上がった。

俺もさっそく準備に取り掛かる。

すでに創造でいつもより大きめの剣を作っておいた。

剣に魔力と気を集め始めた。どんどん溜まっていく。

…まだまだ、まだ足りない。

蒼真が必要な分を溜めているうちにエリザが攻撃を仕掛けた。

「ハアツ!!!」

高速で動きつつ足に集中攻撃を浴びせている。

グリモアもエリザに剣で攻撃しているが、速過ぎて少しも当たらない。

さすがのグリモアも同じところを攻撃され続けるのが少しよるめいた。

その隙をリサは見逃さなかった。

「世界よ、私に力を貸してください…《アイスプレス》!!!」

氷系の魔法でグリモアの周りの地面が凍っていく。しかしグリモア

には当たらなかった。

「（…何を考えているんだ？）」

蒼真がそう疑問に思うのは無理も無いことだろう。グリモアに当たったほうが

効果が高いのは一目瞭然だ。

「《ファイヤーブレス》！！」

今度は炎系魔法を無詠唱で唱えた。詠唱したほうが確実に威力が高いのに…。

しかもまた地面に当たった。

さつきからリサがしていることに蒼真は意味がわからなかった。

しかし、すぐにその疑問に対する答えがわかった。

「（なるほどね。この状況を作るためにか…）」

一番最初に放った氷の表面が解け、滑りやすくなっていた。

予想通り、グリモアはその巨体を揺らしながら転んだ。

そこにさらにリサとエリザが追い討ちをかけようとする。

…おまえらだけでも倒せたんじゃない？

自分の仲間たちのスペックの高さに思わずそう思ってしまう蒼真であったが、

二人が時間を稼いでくれたおかげで剣には十二分に力が溜まっていた。

「おーい！準備ができたからどいてくれー！！」

二人は飛び退いた。

「さて、これでもくらいやがれッ!!」

黒龍流剣 秘奥義 《次元断》しげんだん!!」

超スピードで縦に空気を切り裂く…。

魔力と気が混ぜ合っただけでできたエネルギーが容赦なくグリモアの巨体に降り注いだ。

あまりの威力に空間が裂けてしまった。さすがのグリモアの強固な鎧でも、

空間ごと裂けてしまっただけでは対処のしようが無かった。そのまま真っ二つに切り裂かれた。

「ふう…終わったな」

「はい、お疲れ様です」

「おう！おまえらもな！！さて、素材剥ぎ取ってギルドに戻ろうぜ」

「はい！」

「了解した」

そのあと、素材をすぐに剥ぎ取り、ギルドへと向かった。

ギルドに着くと、ギルドマスター（以下GM）と説明してくれた受付嬢が迎えてくれた。

「まさか本当にグリモアを倒してくるなんてね…少し信じられないよ」

「アンタが倒してこいって言ったんだろっ！」

「フフ、冗談ですよ。まあ、正直驚きすぎてテンションがおかしくなってますがね」

「いつもだろ。…たく、アンタと話していると疲れちまうな」

「フフ、すいませんwww」

なんだろう。すげえKILLしたくなるんだけど…

「まあ、そんなことは置いといて、だ。本当に二つ名が手に入るんだよな？」

「はい、もちろんですよ。今までグリモアを倒した者はいなかったんですから」

「そうか。ならいいが…」

「あ、そうだ。ギルドカードができましたよ」

「ギルドカード？」

そう尋ねるとGMは、信じられないと言いたげな表情をした。

「いやはや…。ギルドカードの事を知らないのにグリモアを倒してしまっなんて…」

「しょうがねえだろ、まだ説明受けてねえんだよ」

その言葉を聞いた受付嬢は泣きそうな顔になってしまった。

「すみません、すみません！…説明するの忘れてました」

やべえ、ホントに今にも泣いてしまいそうだ。なんとかフォローをしねえと。

「別に君が悪いわけじゃないって。悪いのは説明中に全部そこで笑っている

ギルドマスターだから」

「え！？私のせいなんですか？まあ、いいですけどね」

「ほら、悪の根源も認めていることだし」

「なんかどんどん悪くなっていきますね、主に私の立場が」

うるさい、おまえは黙ってるとは言わない。返事しちまうとメンド
そうだからな。

だんだん受付嬢の表情が明るくなってきた。

よし！あと一息だ！！

「あっ、そうだ！君の名前を覚えてくれないか？」

「私の名前、ですか？」

「うん。君、君って言うてるのもなんか失礼だからな」

「…はい、わかりました。私の名前はローラ・コレットと言います」

「ローラ、か。わかった。じゃあ俺もローラって言うから、ローラも俺のこと」

ソウマって呼んでくれ」

「わかりました…ソウマ様」

「様、なんてつけなくていいって」

少し悩んでいる。

「…では、ソウマ君、と呼んでもいいですか？」

なんかこそばゆいな。まあいいけど…

「いいぞ。じゃあよろしくな!!」

「はい!こちらこそよろしくお願ひします!!」

うん。やっぱり元気な笑顔が一番だな!

「クスツ、ローラは笑顔が一番可愛いよ」

ここに来ました、蒼真の固有スキル。さらに微笑みのコンボ。

「え、えつと…。あ…あ、ありがとうございますう…」

ローラの顔はすでに真っ赤だ。

…着々とハーレムを作っていく蒼真であった。

ちなみに、リサとエリザは蒼真の後ろで今後の緊急会議を行っていた。

議題はもちろん『蒼真の節操の無さについて』である。蒼真はそのことについて気づくわけがなかった…

ローラが落ち着いたので話を進めることにした。

「じゃあローラ、ギルドカードの説明よろしく」

「はい！！では説明させていただきます。

ギルドカードとは簡単に申し上げます、身分証明書のようなものです。

色々な街に入るときにギルドカードを見せれば、すぐに入ることができます。

あと、ギルドなどで依頼を受ける際にそれに書いてあるランクを見せることで

そのランクに合った依頼を受けることができます。二つ名なども記載されます」

「なるほど、理解した。で、そのギルドカードができたのか。

じゃあ、もらうの二つ名もらってからでいいや。どうせそんなに時間が

かからないだろ？」

その質問にGMが答える。

「はい、今からギルド本部に報告しますので明日の朝には二つ名がもらえる」と

思いますよ」

「了解。じゃあ明日またくるわあー」

「わかりました。では待ってます」

俺たちは宿に戻り、夕食を食いまくりー（食いまくったのは俺だけどな）

明日早くギルドに行くためにさっさと寝た。

翌日、早朝にギルドへと向かった。

早朝なのでゴリマツチヨ共はいないようだ。

「おはよう。ギルドカードをもらいにきたぜ」

「フフ、もう二つ名を記載してありますよ。ご自分の目で確かめてください。

ではどうぞ、これがギルドカードです」

GMから黒いカードをもらった。なにげに硬い。

見てみると上から名前、ギルドランク、二つ名、倒した魔物の順に書いてあった。

二つ名は…

「…漆黒の覇者、か」

なんていう厨二。もちろん言葉には出しませんよ、ええ。

たぶん服装が黒いから『漆黒』で、グリモアを倒したから『覇者』ということ

なんだろうな。

「これで王様と決闘できるんだよな？」

「えっ!?!」

GMはその言葉に驚きを隠せないでいる。

「いや、だから…王様と決闘すれば一つだけ願いを聞いてくれるんだろ？」

「は、はい。確かにそうですね…」

「けど、なに？」

「その制度は先日無くなりましたよ」

「は？」

「ですから、その制度なら先日無くなりました」

「はいいいいいいいッ!?! ちょ、ちょっと待て!!」

俺は何のために二つ名手に入れたんだよ!?!」

その問いに対して、GMが実に愉快的な顔をして答えてくれた。

「フフ、完全に無駄、でしたね」

OTZ

俺の頑張りは何だったのだろうか? つうか王様ビビリ、もしくはへタレだろ?

…こうなったら仕方ない。最終手段だ。

グリモアを倒してから密かに考えていたプランH-Iを使うことにしよう。

「じゃあここにはもう用は無い。またなギルドマスター」

そう言って立ち去ろうとすると、誰かに服の裾を引っ張られた。

「ん？」

見ると、そこには昨日名前を知ったローラがいた。

「何か用か、ローラ？」

ローラはまたも泣きそうな顔をして俯いている。

「え、あ、あのですね…わ、私も！！連れて行ってください！！」

「お願いします！！！！」

「は！？マジで！？…おい、ギルドマスター？…いいのか？」

「はい、昨日の夜にその話を聞きまして許可しました」

「…たく、もう決定事項みたいなもんじゃねえか。…しょうがねえな、

一緒に来たければついてこい」

「は、はい！！」

…また仲間が増えたな。

賑やかになるのはいいけど、このままの勢いだと一つの組織が作れ

そうだな。

…ん？組織？……………そうか！！いいこと思いついたぞ。

さっきのプランHTに組み込めば…ククツ、案外すぐに偽神共を潰せそうだな。

「よし、じゃあ出発するぞ」

三者三様の肯定の返事が返ってくる。

こうして4人は街を出て行った。

感動の場面だ……たぶん(ボソッ)(後書き)

1週間空けた割には文が雑だし、内容も薄いですね

現在、反省してます(汗)

次回は蒼真さんが思いついたプランHTを実行します

お楽しみに

蒼真は組織を作って、仲間創る（前書き）

はい、どうもレミリスです

あと3日でテストです…課題やってませんW

勉強？なにそれ、おいしいの？

…完全に手遅れですw w

課題をやるために、今回は少なめです

でわどつござ

蒼真は組織を作って、仲間創る

プランHT…。

前回、蒼真が考え付いた一（企んだ）計画の名称である。
その計画とは…

「「「ひたすら、とつげき？」「」」

そう！プランHTとは、

H ひたすら

T 突撃一（笑）

の略である。

…この言葉だけでは説明が足りないので、ちゃんと説明しておこう。

「ただ突撃あるいは攻撃するわけではないぞ。俺の神様能力を使って組織を作るんだ。それもとびつきり強い集団をな」

「作ってどうするんだ？」

「良い質問だ、エリザ。しばらくギルドで名を上げるために活動して、

国王に俺の名を売る。そうすれば俺の力を借りたいって言うてるだろ？」

「確かにそうだな。しかし、力を貸して欲しいって言うてこなかったら？」

…ふむ。それは考えてなかったな。どうしようかなあ。

国王がダメならあっちの帝王に名を売る…ってのはダメだな。

世界が滅びちゃうよな。それなら…

「独立して俺の国を作る」

「「…は!？」」「」

「だから俺の国を作る」

「ちよ、ちよっと待ってください。国を作るにはすごく時間がかかりますし、

資材とお金、なにより国民がいないと成り立ちませんよ?」

そうローラが反論してきた。

ちなみに、旅の目的と俺が神様だっていうことはすでに話してある。もちろん驚きまくりでした。

で、話を戻すが国を作るのに必要なことなど、とっくに考え付いてある。

「逆に聞くけど、俺に国が作れないと思うか?」

「…そうですね、とても思えません。蒼真君は神様でしたね。すっかり忘れてました。

蒼真君を見ていると神様だとは思えなくて…」

納得してくれるのは良いが、少し言葉に棘がないか?

ここにローラ腹黒疑惑が浮上した。

「まだ神様になったばかりだから基本的には人なんだよ。

つつか国を作るのは王様が力を求めてこなかった場合であって、すぐに国を作るわけでもないから大丈夫だ」

「わかりました。そういう形で納得しといてあげます」

腹黒ってどうか性格変わってね？まあ、いいけど。

…さて、組織を作るためには国ほどではないが大勢の人が必要になってくる。

良い人材がどこかにいればいいんだが、そろそろ強い奴などいないだろう。

それならエリザミたいに擬人化した魔物を創造したらどうだろうか？
例えば、グリモアをたくさん量産し、兵隊を作るとか。

……嫌過ぎる。とてもじゃないが恐ろしくて実行できない。

そんなバカなことを考えていると、リサが根底を覆すようなことを俺に言ってきた。

「みなさん気づいていませんが、ひたすら突撃っていう作戦のわりにあまり攻撃的なことをしないですね」

…盲点だった。勢いとノリだけで付けた名だったので、内容がそれに対して
関係しなくなってしまった。

「H A H A H A、何を言ってるイル。この作戦名にしたのは、気持ち
は常に

攻撃的だという意味があるノダ!!」

「…そうでしたか。勢いとノリだけで名づけたのかと思ってました」
その通りです！リーサ大佐!!

「まあ、ある程度作った組織が大きくなったら偽神共に攻撃するけ

どね」

「了解です」

そのためにも帝国の情報を詳しく知っておかないとな。偵察用の魔物でも創っておくか。

「《生物創造》」

そう呟くと、目の前に鎧を着た騎士が現れた。擬人化したグリモアだ。

外見は、かなりゴツイ。顔はコワモテだ。

「ふむ、我を創ったのはどなただ？」

その言葉を聞き、一步前へと踏み出す。

「俺が能力でおまえを創った」

「そうか…。貴殿を主と認識した」

突然、生物を創造したから何事かと三人がこっちを見つめてくる。よせやい、照れちまうぜい…って、ネタをやってる場合じゃねえな。説明してやらんと。

「こいつは俺が創ったグリモアの人バージョンだ。帝国へ偵察させるために」

創った。名前は…レイク。性別は見りゃわかるが、男だ」

「了解した、主よ。我はレイクと名乗ることにする。よろしく頼む」
レイクが話したすまで少し呆然としていた三人も自己紹介し合いました。

…自己紹介が終わったようだ。

「さて、落ち着いたところで話を進めようか。先ほども言ったとおり、

レイクには帝国に向かってもらい偵察をしてもらうことになる。
頼んだぞ」

「了解した」

「あと、レイクには最高峰の剣術と中級レベルの魔法を能力付与で
与えといた。

しかし、敵陣に行くにはいささか無用心だと思っから、もう
一人俺が魔物を創る。

そいつと一緒に行動してくれ。…じゃあ創るぞ。《生物創造》！」

魔法を唱え、新しい魔物を作った。

大きさは俺の手のひらに乗るぐらいで、羽があり、性別は女の子だ。
俗に言う妖精の類だな。

「あ、あのう…私を創ったのはあなたですかあ？」

少し間延びした口調だな。別にいいけど。

「そうだ」

「で、では…ご主人様あ、よろしく願いますう」

ペコリと頭を下げ、おずおずと挨拶をする。

「……か」「」

か？

「……かわいいーッ！……」

女性陣が騒ぎ出した。とりあえずうるさいので落ち着かせとく。

……ていうか、エリザよ。口調が変わってないか？

これが女性の神秘ってやつだな。

「静かにしろよ？今から説明するから。……で、こいつは妖精の中でもかなり

高位の魔物だ。名前は……そうだな。リリアだ。仲良くしてやってくれ。

レイクには説明したが、リリアはレイクと一緒に帝国に偵察しに行って

欲しいんだ」

「了解しましたあ、ご主人様あ」

「戦闘面では、特に魔法に長けているのでレイクとのコンビでは上手く

かみ合うと思うぞ。……で、二人にはこれを身に着けてもらう」

「これは……」

「イヤリングですかあ？」

「そうだ。そのイヤリングには、いつでもどこでも俺と念話ができる能力と、

俺がいる場所に転移ができる能力、それに守護の魔法を付けておいた。

ちなみに念話は、俺以外の奴に使う場合は1キロ以内だったらできて、

転移は、転移をした場所と俺がいる場所を行き来できるぞ」

「わかった」

「わかりましたあ」

「あと、このシールもあげよう」

そのシールの模様は、星が黒い雷によって破壊されている模様だった。

「「しーる？」」

「ああ、この世界にはシールが無かったな。シールっていうのは、表に模様が描いてあり、裏には粘着性の高いものが付いているんだ。

で、こういうふうに貼って使うんだ」

実際に右手の手の甲に貼ってみせる。

「そして、この模様は俺の組織の者だという証拠みたいなもの…」

まあ、国の国旗みたいなものだ。あと、そのシールは一回貼ったら

はがれないようにしないといたから、ちゃんと場所を考えて貼れよ？
もちろんミスしたら俺が貼り直してやるよ」

二人は少し考えてから、俺と同じところに貼ることにしたようだ。その貼っている間に、他の三人にもシールを配っておいた。みんな俺と同じ場所に貼ったようだ。

「じゃあみんな貼り終わったようだし、これからのことについて話し合おうか。」

とりあえず組織の名前を『黒雷』^{くわらい}という名前にしようかと考えたんだが…

異論は無いか？」

俺以外のみんなが頷いて、肯定してくれた。

「では、黒雷に決定する。もちろんリーダーは俺な。んで、副リーダーは誰にしようか…」

「はい！私がやりたいです！！」

リサが勢い良く手を上げた。

「理由は？」

「なんか偉そうなのと、ソウマさんとずっと一緒にいられそうだからです」

…最初の理由もなにかダメな気がするんだが、二つ目の理由は恥ずかしすぎるぞ？

よくこんな恥ずかしいことが堂々と言えるな。たぶん、他意は無いと思うが…

「…じゃあ、リサが副リーダーということでもいいか？」

「少し納得できないが、賛成ということにしておこう」

「同じく納得いきませんが、賛成です」

「賛成だ」

「賛成ですう」

若干二名が不満気だが、一応賛成してくれた。

「リサが副リーダーということで決まりだな。…じゃあ、今後について説明するぞ。」

これから二手に分かれて活動することになる。俺、リサ、エリザ、ローラの

四人は資金調達と人材補給だ。資金については十分持っているが、いくらあっても

困らないから今まで通りにギルドで依頼をこなして集める。人材に関してだが…

ローラ、若くて強い奴らが集まっている場所がどこかにないか？」

「それなら王都オリエンスにある魔法学校に行けば、たくさんいると思いますよ？」

「そうか…。じゃあ俺らは魔法学校を目指すことにしよう。んで、レイクとリリアは

偵察をしてもらう。資金は渡しておくが、もっと必要になったら自分たちで

集めてくれ。今から言う事は最重要の命令だ…ヤバそうだったらすぐに

こっちに転移してこい、わかったな？」

「ああ、わかった」

「わかりましたあ」

「では、解散！！」

そう言ってレイク、リアの二人と別れた。
次の目的地は魔法学校だ！！

蒼真は組織を作って、仲間創る（後書き）

ちなみにプランHTは本来こんな意味ではありませんでした

ひたすらチートということにしようかと考えてましたが、チートの頭文字が

Tではなく、Cだということに気がつきまして、ええ。

急遽、変更しました

たぶんこのままだと更新不定期になりそうな気がする

でわこのへんで失礼します

設定集〜見た方がいいよ編〜（前書き）

色々な設定です。

といってもキャラがほとんどですけどねw

設定集〜見た方がいいよ編〜

キャラクター

主人公

名前：黒龍コクリュウ 蒼真ソウマ

容姿：イケメン。黒いコートと、ズボンという実に真っ黒な感じ。

ちなみに生粋の日本人なので髪と目も黒い。

能力：格闘、剣術、魔法、知能、言語理解能力：すべてMAX！！

いわゆる『全知全能』

しかし、まだ使いこなせていない。

備考：黒龍流剣の使い手。前の世界でも十分に強かった。現在は神様ということになっっている。

最高神

名前：カレン・エクシア・フリード

容姿：かわいい。絶世の美少女。髪の色は、銀と白の中間ぐらい。

服装は世間一般におけるまさに神様って感じの白い羽衣みたいな感じ。

能力：最高神なのでなんでもできます、ハイ。

備考：神様っぽくない神様b y蒼真

リード村の女の子

名前：リーサ・ルイリス

容姿：かわいいのだが、かわいらしいの方が言い得ている。

髪は赤い。目も少し赤い感じ。魔術師のローブを着ている。

能力：蒼真のおかげで魔力が上がり、そんじょそこらの魔術師よりも段違いに

強い。

備考：とにかく蒼真LOVE…この一言に限る。

ドラゴン（擬人化）

名前：エリザ

容姿：美人です。髪は白。肌も白。

能力：蒼真に付与してもらった『変身』という何にでも姿形を変えられる能力。

剣術、魔法ともにトップレベル。剣は蒼真に削ってもらった。

備考：人間の姿に慣れてしまい、ドラゴンに戻ることは滅多にない。

この人も蒼真LOVEです。

元ギルド受付嬢

名前：ローラ・コレット

容姿：本文であまり説明されてなかったもので、ここで説明させていただきます。

可愛い感じで、髪の色は水色です。服装は、全体的に明るい感じ。

上はオレンジを基調とした服で、下は紺のスカート。
スカートの高さは膝より少し上ぐらいです。

能力：まだ未定。一般の兵士や魔術師より強いぐらいにするつもりです。

備考：たぶんこの人も蒼真のことが好きなのだろうね。

世界観

剣と魔法のとってもファンタジーな世界。

街の外には魔物がいたり、精霊とか妖精がいたりする。
レギマリア王国とグリズール帝国が戦争しそうな感じ。
グリズールのどこかに偽神がいると思われる。

設定集〜見た方がいいよ編〜（後書き）

テストが続いているので更新できるか不明です

できるだけがんばります

オリエンスまでの道のり（前書き）

今回もすこし文が少ないです

理由は、例の紙に書くやつです

月曜に投稿とか初めてですね（笑）

オリエンスまでの道のり

現在の状況を説明しよう。

レイク、リリアと別れた俺たちは、王都オリエンスに向かっていた。歩くのがしんどかったので馬車を《創造》で作り、1日かけてあと半分ぐらいのところまでこれた。

ここまで来るのに魔物が、これでもかというほど襲ってきた。

ゴブリンやオークなどの下位程度の魔物からドラゴンの下位種であるワイバーンまで、ありとあらゆる魔物とエンカウトした。

…まあ、どれも神様パワーで一撃で倒したり、ハイスペックな仲間たちが

どンドン倒していった。魔物が襲ってきてもほぼ一撃で終わるので、馬車で移動中はヒマを持て余していた。

あまりにもヒマすぎたので、武器を作ってみた。

黒い日本刀と同色の鞘を作って、切れ味、強度などの性能面を全力で最大まで

強化した。これがあればグリモアの鎧も豆腐のようにスパスパ斬れるだろう。

ちなみに『黒刀』という名前を付けた。…安直とか言うなよ？

しかし、ただの日本刀だとつまらないので、魔力を込めれば黒い炎が出る

能力を付与した。

名前を変更し、新たに『黒炎刀』と名づけた。…だから安直とか言わないでくれ。

試験的にほとんど同じように『黒雷刀』とか『黒水刀』とか作った。

…もう何も言うまい。

そんなこんなで武器を作っても余裕でヒマ人生続行中だったので、GMにもらったギルドカードを詳しく見ることにした。

*名前 ソウマ・コクリユウ

*ランク G

*二つ名 漆黒の覇者

*倒した魔物 グリモア キングウルフ ワイバーン オーク
ゴブリン

今初めて見たが、ランクはGになったー（実感がいまいち無い）。二つ名に関しては何回見ても背中がかゆくなる。

倒した魔物という欄には強い順に10体までしか名前が入らなくて、10体を超えると弱い奴から除名されていくらしい。

…グリモアはずっと残るだろうな。見られて騒がれるのも嫌だし、なるべく

見せないようにしようか…いや、待てよ。名を上げるためには見せた方が

いいかもしれない。うむ、これは悩むぞ。その時になったら考えようか。

まあ、それは置いて…。

俺以外のギルドカードも紹介しよう。

*名前 リーサ・ルイリス

*ランク S

*二つ名 なし

*倒した魔物 グリモア ワイバーン オーク
ゴブリン

*名前 エリザ

*ランク S

*二つ名 なし

*倒した魔物 グリモア ワイバーン オーク ゴブリン

*名前 ローラ・コレット

*ランク A A A

*二つ名 戦場の調律士

*倒した魔物 ダイオウジョウ ワイバーンナイト ワイバーン
ボーンナイト

オーク サンドクロウ ウルフ ゴブリン ジェリ
ム ジエノム

…リサ、エリザはまだいい。ローラ…おまえは何者だ!?

ランクはA A A、二つ名はあるし、よくわからん魔物も倒してるし。
ローラに聞いてみたら、

「仕事の休みに、少しずつ依頼をやっていたらランクがA A Aにな
ってまして…。」

ダイオウジョウを倒したら二つ名がもらえました。ダイオウジョ
ウというのは、

主に魔法が得意な魔物で、魔法の打ち合いをしていたらいつのま
にか倒していました。

あ、もちろん一人で倒したわけではないですよ？まあ、戦闘中に
他の人たちが

負傷して、最終的に一人で戦いましたが…。」

…やはり俺の仲間はハイスペックということか。

俺が能力付与したらさらに強くなるのではないだろうか？

そして、現在に至る。

あと半分ぐらいの距離ではあるが、夜に移動すると危険なので道から少し外れてキャンプをすることにした。

《創造》で簡易式の家を作り、魔法で結界を張っておいた。

家の中を少し掃除する、とか言われ女性陣に追い出された。

なぜに追い出す必要があるんだ？…グスン。

いくら考えても仕方ないので、食料を手に入れるために近くの森へと一人で入っていった。

まさにテンプレだな。

そう思わずにはいられねえだろ、この状況を見れば。

それはほんの少し前のことである。

蒼真は森を歩きまわっていると、なにやら騒がしい声が聞こえたので聞こえる方向へと足を運んだ。

1分も歩かない内に森がひらけたところに出た。辺りを見回してみると、

どこかのフードを被った貴族っぽい少女が一人と女性の騎士が一人、魔物の大群に囲まれていた。

女性の騎士は奮闘しているが、劣勢なのが一目瞭然だ。

早く助けねえと！！

そう思いすぐに行動に移した。瞬時に少女と騎士の前に現れる。

「助太刀する！俺の後ろにいてくれ！」

「だ、誰だ!？」

騎士が叫ぶようにそう言ってきた。

突然目の前に現れたのだから、当然の疑問だろう。だが、この状況下で話をする余裕はない。

「話はあとだ!早く下がれ!！」

「…わかった」

渋々、下がっていった。

「さて…ちょっとだけ本気を出すか」

蒼真の前には、ドラゴンの中位種であるレッドドラゴンと下位種のワイバーンの群れがいた。

「これだけいれば、ブツ倒すのも楽しそうだ…。現れる『黒水刀』!！」

なぜ黒水刀を出したのかと言うと、単純に水に弱そうだという偏見からだ。

まあ、何を出しても蒼真なら倒せそうだが…

「行くぜ!超圧縮《黒水弾》!！」

魔力を込めてレッドドラゴンがいる方に一振りする。

すると、黒い水を圧縮したものが大砲並みの速さでレッドドラゴンを貫いた。

少し遅れてからレッドドラゴンが力尽き倒れた。
それを見たワイバーン（後ろの二人も）が戸惑い、隙を作っ
てしまふ。

その隙を蒼真が見逃すはずがない。

蒼真は黒水刀を振り上げ、地面に刺した。

1秒も経たぬ内に刺した地面から無数の触手みたいなものが出て
きた。

どれも先が鋭く、貫通性が高いことが容易に想像できる。

「我が手、我が足と成りて働け！ 《黒水牙》^{こくすいが}！！」

100体以上いたワイバーンが次々と串刺しにされていく。
瞬く間にすべての魔物が倒れ伏した。

「ふう……。終わったな」

後ろに振り返る。

二人を見ると、驚きで声も出せないようだ。

「おい、終わったぞ？」

その言葉を聞いてやっと気がついたようだ。

「あ、ああ。あなたのおかげで助かった。ありがとう」

「どういたしまして。じゃあ俺は帰るんで……」

そう言い、来た道に戻ろうとすると、コートの端を誰かにつかま
れた。

また振り返る。

騎士ではなく、もう一人の少女の方だった。

「待ちなさい」

いかにも高飛車のお嬢様って感じの声だった。

「何か用か？」

「もしかして、女性ふたりをこんなところに置いていく気かしら？」
周りを見してみる。辺りにはドラゴンの残骸、ワイバーンの死体がある。

「…そういうことか。近くで仲間が待っているんだけど…一緒に来るか？」

微笑みながら尋ねる。

「ついてく。というか嫌と言ってもついていくわ」

顔を赤く染めて答えてきた。気のせいか、騎士の方も顔が赤いような？

「了解。名前はなんていうんだ？」

「名前を尋ねる時は、自分から言いなさい」

その言葉に苦笑する。

「失敬。俺はソウマ・コクリュウっていう者だ。最近、立ち上げた

黒雷という

組織のリーダーをやっている」

「ふん、私の名前はレイシア・レギマリア。第三王女よ」

「ふん、第三王女ね〜…って、第三王女!?じゃあお姫様って
ことか?」

「まあ、そうなるわね」

マジか!?お姫様がドラゴンに襲われるとか…どんだけテンプレだよ?

口調が全然お姫様っぽくないと思うが…。

「…そうか。じゃあフードをとってくれ」

「なにが、『じゃあ』なのかわからないんだけど…。

しょうがないわねえ、見せてあげるわ」

フードに手をかけ、徐々に見えてくる。

フードをとり終えたあと、レイシアの頭の上を見てみると

二つの『なにか』が見えた。

よく見てみると…

「ね、猫耳だとオオッ!？」

猫耳でした。実際にお目にかかるとは…いい。なんだかよくわからないけど、

すごくいい。鼻真目に見てもかなり可愛い。

「なんか第三王女って言ったときよりも驚いている気がするんだけど?」

「気のせいだ」

そのあと戻りながら、自己紹介中ずっと空気だった騎士とも話した。名前はエルで、王国騎士団長らしい。ギルドにも行ってるらしく、ランクはSだそうだ。

王国騎士団長には統率力とかで評価され任命されたらしい。

適当に世間話をしていたらさっき作った簡易の家に着いたようだ。

「こんなところに休憩所があったか?」

エルが呟く。

「俺がさっき作ったんだよ」

「…え?」

「だから俺が魔法で作ったんだって」

「そ、それは本当か!?!」

「ホント、ホント。俺、空間魔法と創造魔法使えるし」

「もう人外だな」

「…それを言わないでくれ」

自分でも気にしてるんだから。

「じゃあ入るわよ」

「どっぞ〜」

適当にそう返す。…ってあれ？やばくね？誰にもレイシアとエルが
来ること

言ってるねえじゃん。

「ちよ、ちよっとま」

タッタッタ、パタン。

…もうレイシアが入った後でしたorz

（状況説明中）

いろいろと心が折れそうだった。なんで怒っているのかよくわから
ない。

リサとエリザは『緊急会議』とか言ってる何か話し合ってたし、ロー
ラは

真正面から毒舌説教された。

もはや俺のライフは0だろう…ガクッ

まあ冗談はさておき、なんとか二人をここに泊めるように説得(?)
できたので

重畳だ。(精神的ダメージは冗談では済まなかったが…)

夕飯だ、夕飯。さっき倒したドラゴンを俺の空間に入れといたので、
ドラゴンの肉でバーベキューだ!!そして、明日は王都まで直行だ
!!!

と、意気込んだ蒼真であった。

ちなみに、夕飯の時に俺だけ肉の数が少なかったのは気のせいだろ
うか？

オリエンスまでの道のり（後書き）

次回は王都に着いてからの超展開が起こる気が…しなくもないw

でわお楽しみに

とりあえずの閉幕、物語は次のステージへ（前書き）

どうも、レミリスです

今回は、短め&超シリアスです

『この』お話では最終話になります

批判がかなり多いと思われませんが、覚悟の上です

まだ書くことがあります、先にお読みください

とりあえずの閉幕、物語は次のステージへ

朝起きる。

…当たり前前の行動だ。

しかし、そんな当たり前の中に一つだけおかしいものが…。

それは……寝てたはずなのに目一杯の大空と太陽が見えるんだだけ……。

そんなことを考えている内に、昨日何があったかを思い出した。

昨日の夜、家で寝ようとしたら、まだ怒っているリサ、エリザ、ローラの三人に、

「外で寝てください」と黒い笑顔で言われた。

これ以上逆らうとろくなことがないと思い、素直に外に出た。

まあ、男と女が一つ屋根の下で寝るのが間違いか、と納得した。

もう一つ家を作るのが面倒で、しかも眠くて早く寝たかったのでそのまま外の比較的草が多いところで寝た。

そういう経緯でこうなった。

…俺って組織のリーダーだよな？そうだよな？

……やめよう。これ以上考えると泣けてくる。

三人になんとかして許してもらおう。それしかないと思った。

そのあと、すぐに家の中に入り土下座をした。

「ホントにすいません。なんでもしますから許してください、お願いしますう」

我ながら情けねえな、と思うが仕方ないこと(？)だ。
つつか、いまだになんで怒っているのかわからないんだけど…

「…………… 本当に『なんでも』ですね？」

「…実現可能な範囲でお願いします」

「そうですね。少し待っていてください」

なにやらリサ、エリザ、ローラの三人で話し合いを始めた。
あとから来た王女騎士コンビも加わり、それから10分間待たされた。

もちろん俺は聞こえないところで律儀に待っていた。
10分間がかなり長く感じ、そしてヒマだった。

話し合いの結果(？)を聞かせに俺の目の前に皆が来た。

「それでは、判決を下します」

…いつから裁判になったんだ？

「判決は…………… 私たち全員と付き合ってくれれば許す、ということに
します」

「…………… はい？幻聴が聞こえたようだ。もう一回言ってくれないか」

「…………… だから、私たちを妻にしてくれれば許します」「……………」

「さっきよりグレードアップしてんじゃねえかッ!？」

「「「「聞こえてるじゃん!?!」「「「「「

いや、自分でも思ったよ?このツッコミは無いだろって。
しかもレイシアとエルもか!?

……………でも、今はそんなことより…

「…皆は俺なんかでいいのか?俺はおまえらが良ければいいけど…」

「私は最初からソウマさんに一生ついていくと決めてましたから大丈夫です。」

両親にも、ちゃんと言いました」

「私もだ。ソウマさまに一生ついていく」

「私もです。受付嬢をやめた時から、この人についていきたいと思
ってました」

「私もドラゴンから助けてくれた時から、一緒にいたいと思ったわ」
「私だって、助けてくれた時から、おまえしかいないと思っていた
ぞ」

「そうか。だったら」

ハッ、ここどこだ?」

さっきまでハーレムを築き始めようとしていた気がするんだけど…
まさかの夢オチか?

ていつか、この真っ白い空間って…

「…神界か？」

「そうよ」

「ッ！？誰だ！？ってカレンかよ！！いきなり出てきたから驚いたぞ」

「それについては謝るわ。…これから言うことをよく聞きなさい」

「な、なんだよ？急に改まって…」

「いいから聞きなさい」

カレンは、いつになく真剣な表情をしている。

…嫌な予感がする。

「…了解。じゃあ続きを話してくれ」

俺も真面目な表情に切り替えた。

「じゃあ話すわね。…蒼真がさっきまでいた世界がね」

さっきの嫌な予感よ、外れてくれ！！

しかし、蒼真のその願いは無情にも切り捨てられた…。カレンはその続きを告げた。

滅んだ、と。

「な、なんで？…どういうことだよ！？答えろよ！！」

自分でも感情をコントロールできていないことがわかる。
でも、止められなかった。
認めたくなかったから。
失いたくなかったから。
一度得た幸福を手放したくなかった…

カレンは感情を押し殺したような顔で、淡々と説明しだした。

「…あなたが昨日寝たあとにその『災厄』が起きた。いきなりの出来事

だった。神でも予測できなかった。いえ、神だからこそ予測できなかったのかも
知れないわ。偽神を倒せて私は言ったよね？」

「…ああ、言ってたな」

「その偽神、本来なら世界を破壊するほどの力を手に入れるのには、
まだ

時間があったはずなの。なら、どうして？って思うでしょ？」

「ああ、そう思うから早く言ってくれ！！」

「…偽神に第三の存在が手を貸したのよ、魔界の王…魔王が。魔王
の力を

借りて偽神はあなたが寝ている間に世界を滅ぼしたのよ」

……………ショッキングだった。俺が『寝ている間』…だと？

…殺す。ぜってえ見つけ出して殺す！！

……………落ち着け、俺。それよりも大切なことがあるだ
ろ。

「……………あいつら…俺の仲間たちはどうなった？」

「違う世界に転生させたわよ。絶対に幸せになるように…。もちろん前世の記憶は消去しといたわ」

「そうか、その方がいいだろうな。…それで、あのクソ共はどうなった？」

「今の『世界』を壊してしまったから、次の『世界』に行くために力を蓄えているわ」

「その世界に転生させてくれないか？」

一瞬、カレンの表情が悲痛なものへと変わった。それだけでわかってしまった。

「……………結論から言うと、『無理』よ。転生は一人一回までしかできないの。」

身体的にも、精神的にも絶対に『無理』よ

「…そうか……………」

落胆を隠せない。

「でも、待ってなさい。必ず方法を見つけるから。」

…疲れたでしょ、今は眠りなさい。その時が来るまで…」

ああ、ホントに疲れた。

カレンの言うとおりで眠っていよう。

いつになるかわからないけど、信じていよう。

今までの自分から変わろう。

なにも守れなかった自分から…。

『不幸』から『幸福』へと変わろう。

…もし転生できたら、名前を変えようかな？

心機一転ってやつだ。

憎しみの『黒』から無垢な『白』へ。

悲しみの『蒼』から喜びの『紅』へ。

だから今は眠ろうか。

…おやすみ。

とりあえずの閉幕、物語は次のステージへ（後書き）

今までありがとうございました

でわまた、ご縁があったら会いましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7588q/>

まさかの神様！？

2011年9月5日12時07分発行